

## 最高学部

### 2023 年度最高学部 4 年課程卒業研究・2 年課程卒業勉強について

奈良 忠寿

2023 年度最高学部 4 年課程卒業研究は 27 人が 21 のテーマに取り組んだ(個人研究 19・共同研究 2)。2 年課程卒業勉強は 6 人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文にまとめられ、2024 年 2 月 16・17 日(金・土)に自由学園創立 60 周年記念講堂で開催された報告会で発表された。

#### I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は 4 年課程(四年制)・2 年課程(二年制)とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の 1 年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められるだけでなく、卒業直前に開催する報告会で口頭発表され、論文は自由学園図書館で保管されている。

4 年課程の卒業研究は、3 年次から 2 年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。領域横断研究は、最高学部で展開するリベラルアーツを土台とする研究である。学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多く、設定した研究課題の解決のために必要な専門分野を修得し、特定の専門の枠を超えた研究活動を行うことで創造的に探究する力を養う。

経営実践研究は「マネジメント」ゼミナールからなる。自由学園の教育理念に呼応する経営者像を掲げ、人を大事にし、社会への新たな構想を持ちつつ、事業革新に挑戦する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う。マネジメントに所属する学生は 3 年次に学外研修(おもに企業インターンシップ)を行うことが義務付けられている。

卒業勉強に関しては、ゼミは設置されないが、1 年次の終わりからテーマを話し合い、アドバイザーのもとで 2 年次から毎週定期的に時間をとり、勉強を進めている。

#### II. 2023 年度の研究内容

2023 年度の 4 年課程卒業研究と 2 年課程卒業勉強はどのようなものであったか。報告会の予稿集(最高学部 2024)をもとに研究タイトル一覧と一部の研究の概要を紹介する。また、最高学部が発刊しているジャーナル誌『生活大学研究』vol.10 に 2023 年度卒業勉強・卒業研究報告会

の概要が掲載される予定であり(奈良 2024)そちらも合わせてご覧いただきたい。

#### フィールドサイエンス

2 本の論文が執筆された。タイトル番号 1 は、2021 年度卒業研究「武蔵野の水源の森の若返り一向山緑地の変化とナラ枯れ」の続編と位置付けられる研究である。著者は 4 年次にギャップイヤーを取得して休学しているため、3 年生として 2021 年度も共同で調査にあっていた人物である。対象地は高齢化した二次林であるが、森林環境譲与税充当事業による萌芽更新を目的とした伐採事業後の萌芽状況とナラ枯れの調査などを行った。さらに対象地の現状把握のために 10 年ごとにおこなっている樹木調査を行い、伐採事業による変化を明らかにしている。本論文の成果の一部は第 135 回日本森林学会大会にてポスター発表された。

#### ヒューマンサイエンス

8 本の論文が執筆された。論文 5・論文 6 は著者の経験を踏まえた当事者研究の側面がある。論文 4 も著者自身が生徒として学ぶ中で見聞きしたことが問題意識の発端となっている。現場の実態をカリキュラムやインタビュー等を通して調査し、考察を加えているが、折しも 2024 年度から女子部・男子部が共学化するタイミングでもあり、共学化で変わる女子部の貴重な研究となった。

#### データサイエンス

6 本の論文が執筆された。論文 11 は著者が「あるといい」と思うアプリを制作し、その効果を検証した研究であり、アプリ制作力には非凡なものがあった。一方で論文 13 も

論文 11 と同様に著者が「あるといい」と思うアプリを制作したが、その手法としてあえて「ノーコードプラットフォーム」という専門的の量を必要とせずにアプリを制作できる手法を採用した。それぞれの研究は別個のものであるが、両者を比較することで、アプリ制作手法の長所短所に気が付けたことは興味深かった。論文 16 は実験データを統計解析し有意性の検証を加えている。

### ライフスタイル

論文としては 1 本になっているが、共同執筆者 6 名がそれぞれ「自由学園のブランド評価と方向性」「自由学園最高学部の食の学び」「自由学園における記念日の食事」「自由学園最高学部における昼食システムの改善の提案」「最高学部女子学生の新しい体操会衣装の提案」「プラスチックフリー宣言によるブランド価値向上の可能性」というテーマで調査研究を行っている。ゼミではこれまで 3 回にわたって(2005 年度、2012 年度、2017 年度)自由学園のブランド価値に関する研究を行っており、それらの研究との比較・検討も加え、自由学園最高学部生が「食」「体操会」「自然豊かな環境」に積極的にかかわり、イメージ強化することがブランド価値向上につながると結論付けた。

### マネジメント

2 名による共同研究 1 本と個人研究 3 本が執筆された。どの研究もゼミナールで必修とされる学外研修の成果を研究として深めている。

論文 21 は分析資料としてホテル情報サイトに記述してある口コミ情報を収集するというユニークな手法をとっている。

### 2年課程

1 本の論文にまとまっているが、「中等科・高等科の食教育への提案」として 3 名が、「懇談の歴史と体系化の提案」として 1 名、「モノ資料における新たな平和教育への提案ー川田文子さん資料を手がかりにー」として 2 名が個別に勉強を進めた。

領域横断研究：フィールドサイエンス	
1	武蔵野の水源の森の若返りー東久留米の高齢化した雑木林についてー
2	人は何故怪獣に惹かれるのか？ー怪獣の魅力の正体を解明するー
領域横断研究：ヒューマンサイエンス	
3	「公的領域」観を再考するー私的領域の経験と行為の脱アイデンティティ化に注目してー
4	自由学園女子部中・高等科の教育理念と現場の実態についての考察
5	社会における障害受容の考察ー映画 2 作品を題材にー
6	慢性疾患をめぐる個人と社会ー先天性心疾患を中心にー
7	化粧品会社と自由学園最高学部学生による新製品の共同開発ー20代前半の女性の敏感肌に合う化粧水ー
8	近代公娼制と廃娼運動の遷移ー売春はなぜ違法化されたのかー
9	グレゴリオ聖歌と賛美の心
10	児童福祉法及び関連法律・条約・憲章・計画からみる児童福祉の在り方ー現在の児童福祉が抱える課題とは何かー
領域横断研究：データサイエンス	
11	最高学部生と卒業生をつなぐWebアプリ「Relinko」の開発
12	竹繊維束を用いた繊維強化プラスチックの作製とその応用
13	ノーコードプラットフォームを利用した食事注文アプリの試作
14	絵画を描くとはー絵画制作におけるドローイングの考察ー
15	プログラミング言語Pythonを用いた音声特徴量の算出
16	コーヒー飲料の摂取が作業へ及ぼす影響の研究
領域横断研究：ライフスタイル	
17	自由学園のブランディングに関する研究ーブランド価値向上策の検討ー
経営実践研究：マネジメント	
18	ブランド共感はどのように創られるのかーD2Cブランドの事例からの研究ー
19	首都圏郊外住宅地の地域活性化に関する研究ーコミュニティデザインを中心にー
20	ゲストハウスから始めるまちづくりに関する研究
21	星野リゾートのおもてなしデザインに関する研究ーカスタマー・ジャーニーの視点からー
2年課程卒業勉強	
22	女子部・男子部の生活教育への提案ー食教育・懇談・平和教育を中心にー

どの内容も一次資料に丹念にあたっており、2024 年度から共学化するにあたり自由学園女子部百年を振り返り次の百年を見据えた貴重な研究となった。体験を研究として客観視し、他者へつたわる言葉を模索するなかで、自分たちが受けてきた教育を再認識したと推察する。

平和教育への提案は著者が高等科 3 年の「探求のまなび」で作成した自作の冊子を自由学園資料室の協力のもと自由学園出版局から出版し、その冊子をつかった平和教育の実践である。この 2 名の活動は東京新聞をはじめとするメディアで取り上げられたほか、2023 年 3 月 3 日に立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターで行われた研究会で「戦争体験のない世代が伝える戦争の記憶 2～自由学園の勤労動員学徒川田文子さんをめぐって～」と題する発表、2024 年 3 月 30 日「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」総会にて「若い世代による戦争体験の継承の試み：自由学園の中島飛行機武蔵製作所への学徒勤労動員と空襲体験をマンガ作品にした山澤遥乃さん・山澤綾乃さん『川田文子さんのこと』の出版、その後の調査・研究について」として著者と指導者による公演が行われた。

### Ⅲ. 2023 年度の報告会

2023 年度は、発表論文数が多いことから、発表時間と発表者と参加者の交流の時間を十分に確保するために、2 日に分けて開催した。年度当初は 1 日での開催を計画していたが、学生リーダーを中心とした運営会議の話し合いを経て、年度途中で予定を変更した。

報告会の形式は 2022 年度を踏襲し、Zoom を用いたオンライン発表を併用しつつ、会場に来場者を受け入れたが、新型コロナウイルス感染症が 5 類とされたことをうけて、会場への来場者の制限を撤廃した。今年度の工夫としては、質疑応答の時間は、ゼミごとに分かれたブースで行ったが、会が 2 日に分かれたことをうけてその日に発表がない研究に関する展示室を記念講堂 2 階の会議室に設け、研究論文や関連資料・成果物を展示した。

### おわりに

2023 年度の卒業研究・卒業論文を概観してきた。2023 年度は自分たちの出身部である女子部・男子部が 2024 年度から共学化することが大きく影響したのか、自身の高等科までの経験をとりあげた研究が目についた。しかし、取り

上げたのは女子学生ばかりである点が興味を引く。

最高学部の卒業研究・卒業勉強は、身近な経験に基づく視点から、社会的課題に切り込む論考が多く認められることが特徴であるが、論文執筆が自分の自由学園での学びの集大成、アイデンティティー確立と結びついている点もまた特徴である。人間形成を目的とする自由学園の教育が結実しているといえる。その点からみると、共学化は学生生徒のアイデンティティーを大きく揺るがしたことを、今年度の卒業論文のテーマは示しているのかもしれない。

### 謝辞

学生の研究指導にお力添え下さったすべての皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。あわせて、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げます。

### 参考文献

奈良忠寿 「2023 年度最高学部 4 年課程卒業研究ならびに 2 年課程卒業勉強について」『生活大学研究』10 巻 1 号 2024 年(投稿予定)

自由学園最高学部 『2023 年度 自由学園最高学部 卒業研究・卒業勉強 報告会 予稿集』2024 年 2 月